あの経験が“私”をつくった

約20年前、日本で研修に参加した人たちがいる。今も第一線で活躍する彼らは、日本で何を学び、自国でどう生かしているのだろうか。

タバレック・イスマイルさん

ジブチ農業・水・漁業・牧畜・海洋資源省

★参加した研修

1993年（5カ月）	土壌・分析技術
1999年（3カ月）	乾燥地農業の水利用
2002年（2年）	かんがいおよび野菜栽培

日本の技術で引き出す農業のポテンシャル

砂漠化を止める―。それが世界一暑い国といわれるジブチの最重要課題。雨が少なく農業に不向きな乾燥地で、水を確保し、食料の生産性を上げなければなりません。その解決に向け、1991年から東京農業大学と共に研究に取り組んできました。

その縁で、2002年から2年間、長期研修員として農大へ。研究室の他、網走や宮古島にある農大の農場を訪れ、砂漠を緑化し、農地にする技術を学びました。地表に敷き詰めた石と石の間に苗を植えて直射日光から守ったり、ため池を造って少ないながらも降った雨水を活用したりと、日本の農業の最先端技術を持つ農大ならではの知恵が盛りだくさんでした。

こうした方法をジブチで試してみると、トマトやタマネギなど、農作物の生産性がぐんと上がったのです。現在は乾燥地に強いネリカ米の導入に向け、ジブチに合った栽培方法や品種を探すための栽培試験を続けています。日本での学びを、そして農大とのつながりを生かし、これからも国民の生活を支える農業の発展に貢献していきます。

東京農大の農場で栽培技術を学ぶ

真面目で一生懸命なタバレックさんは、すぐに学生たちの人気者に

青年海外協力隊員とネリカ米の試験栽培を行うタバレックさん

当時の研修協力機関

東京農業大学 地域環境科学部
高橋悟 教授

タバレックさんは、私たちが1991年にジブチで砂漠の緑化プロジェクトを始めた時からの付き合いです。明るく優しく、面倒見が良い彼は、日本でもジブチでもみんなに好かれています。日本で研修を受けている時は、新しい技術を学びつつ、それをいかにジブチに根付かせられるかを第一に考えていたのが印象的でした。今でも農大のプロジェクトを続けられているのは、彼との信頼関係があるからこそ。日本とジブチをつなぐ大切なパートナーなのです。

ビンドゥ・ラナさん

元ネパール公共事業計画省道路局
シンズリ道路建設プロジェクトマネジャー

★参加した研修

1993年（1カ月）	道路計画
1997年（1カ月）	道路維持管理

引退後もシンズリ道路の専門家として活躍するラナさん

道路で人々の生活を便利で安全なものに

日本で最初に研修を受けたのは20年前ですが、今でもはっきりと覚えています。私たち技術者にとって、明石海峡大橋や本州四国連絡橋などは、世界最高峰の土木技術が結集した“奇跡”のような現場でした。私を含め、開発途上国の研修員にとっては、それを目にすること自体が刺激的だったのです。

さらに驚いたのは、日本ではどこに行っても交通安全に対する取り組みが徹底していること。人々の生活を安全なものにするためにはネパールにも絶対に必要だと同僚を説得し、ガードレールや横断歩道、安全地帯などを首都カトマンズに初めて導入しました。

また、新潟や札幌では山岳道路の建設や雪道の維持管理について学ぶことができました。その知識は私がこの15年、プロジェクトマネジャーとして携わってきたシンズリ道路の建設に役立っています。険しい山々を蛇行する首都と南部をつなぐ道路を、日本の土木技術を参考にしながら造ってきました。この国の人々の生活を変えるこの道路の完成まで、あともう少しです。

東京湾に架かるレインボーブリッジの建設現場を視察

渋滞情報が集まる東京の交通管制センターも訪れた

当時の研修協力機関

日本工営株式会社
ネパールコミュニティ交通改善計画開発事務所
山下佳久 所長

1996年から10年に及んだネパール内戦時代、多くの公共事業が困難に直面しました。そんな中、日本の支援によるシンズリ道路建設事業が動き続けてきたのは、日本での研修で道路建設の知識を学び、大の親日家になってくれたラナさんがいたから。日本人関係者とネパール人技術者の間に立ち、事業を引っ張ってきたラナさんは、道路局を引退した今でもネパール随一の道路の専門家として頼りにされています。